

三島由紀夫の漢語における語構成

——『金閣寺』と『天人五衰』——

新 裕 美

本稿は、『金閣寺』^{注(1)}(S 31)、『天人五衰』^{注(2)}(S 46)の二作品から全漢語を抽出し、それらを形態的側面から考察することにより、三島由紀夫が使用する漢語の特色を論じようとするものである。

三島は『文章讀本』^{注(3)}(S 34)中においても『私の遍歴時代』^{注(4)}(S 39)においても、自己の文体の改革について述べるが、語彙面から見た場合、実際に意図的変革が観察できるのか否か。本稿で対象とした二作品の漢語を比較することにより明らかにする。

1 方法

(1) 対象作品の位置付け

『金閣寺』は昭和三十一年一月から十月まで、雑誌「新潮」に連載された。昭和二五年に金閣寺に放火した実在の青年僧をモデルにフィクション化した作品であり、彼の作家生活においては中期に位置する。当時より完成度の高い作品として評価が高く、三島文学の代表作とみなされている。

『天人五衰』は「豊饒の海」四部作の完結篇である。昭和四五

年七月から翌年一月にかけて「新潮」に連載された。この作品の最終稿は自決の当日編集者に渡されており、事実上彼の遺稿となつたものである。松枝清頭という青年の輪廻転生を本多なる親友の目を通して描いた小説である。

中期から後期にかけての彼の文体の変化を追う時、決して欠いてはならぬのがこの二作品と考えられる。

(2) 三島由紀夫と漢語

三島はその装飾的文章で広く知られる作家であるが、明喩、暗喩等の修辭はもとより、同時代からそれ以後の作家と比較しても漢語を多用する作家群に含まれる。しかし、これは和語に対して漢語重視であると即断すべき問題ではなく、漢語についての調査は、あくまでも三島の語彙を考える上でのワンステップとするものである。従って本稿では漢語を多用するという事実のみを前提として論を進めるに留める。

(3) 漢語の認定

漢語は最早外来語と位置付けられるのではなく、日本語を構

成する重要な要素である。従ってより日本語に帰化した形態として、語尾変化を伴う派生語が多数生じたり、和語・外来語と共に複合語を形成したりと、漢語の様相は複雑多様化してきていると言える。その為、漢語と認定する語も純粋な字音語のみとすることに疑問が生じる。

本稿では、以下の基準を満たす語を全て漢語性を持つ語と認定する。

- (a) 本来の漢語である字音語（梵語を含む）
 - (b) 和製漢語
 - (c) 派生語
 - (d) 造語の一種としての和語・外来語との複合語
 - (e) 重箱・湯桶読みと呼ばれる和漢混種語
- (f) より和語に同化した形態としての字音語平仮名表記
- 梵語については、山田孝雄博士が音訳の語について便宜的に漢語の対象外とするのに対し、佐藤喜代治博士は広義の漢語と位置付ける等、諸説あるが梵語も中国を通じて日本語に入ってきたことから、ここでは漢語の中に含める。
- (e) の和漢混種語は和語・漢語いずれにも分類し難い語であるが、漢語の非常に日本語化した形として、また、(f) の字音平仮名表記も同様であると考へ、漢語と一緒に考察すべきものとする。
- また、固有名詞は、和語に置換できない語であり、作家も半無意図的に使用するものとして、対象外とすることを注記する。

(4) 単語の単位

単語の認定単位は調査目的によって種々異なるが、本稿は三島由紀夫の文章表現を構成する漢語の特色を主眼とすることにより、国立国語研究所の所謂 α 単位注(7)を用いる。また本稿では、さらにできるだけ複合形式を重視し、文節から助詞・助動詞を切った単位として、「消息不明」「自家製ハム」等も一語とみなした。

漢語が本来一字単位の語であることは言うまでもないが、前述の通り、漢語が日本語に同化した現在、また特に作家の文章表現における漢語の位置付けを論ずる際には、二字漢語を一字ずつに分解して考える必要はないと考える。又、 β 単位注(8)が現代語としての意味を担う最小単位として「表現/法」とする如く、複合形式をすべて分解することによって、作家の意図した語彙を不明にすることも本稿の目的に反する。

2 概観

『金閣寺』の漢語は延べ語数で一四七語、異なり語数四二五二語である。全集本の形式（一八行・一行四三字）で、二六六頁という分量から勘算して一頁平均四二語の漢語が使用されている計算となる。

実際の事件に題材をとっていることから、年月日等の数量的語や、具体的事象を示す語も比較的多数用いられる傾向にあるが、三島作品の特色を成す観念的語彙が大勢を占めることは重要である。

「世界」「美」「認識」「行爲」「死」「生」「存在」「時間」等観念的語は、繰り返し使用され、作品のキーワードとしての地位を持つ。これら多用語は、使用度数10以上のもので一七五語あり、使用度数1又は2の語が全体の約九〇%を占めるのに対し、特異なグループを形成している。

また禅宗の寺内生活が描かれている為、仏教語も多数現れる。「入院する」「作務」「内開枕」等の語がそれであり、殆どルビ付の形を取る。

『天人五衰』の漢語は延べ語数一二二〇七語、異なり語数五〇九七語であり、『金閣寺』と比較して、延べ・異なり語数共に約千語（異なり語約八百）増加していることがわかる。これは『天人五衰』が全集本形式に勘算して約三十頁多いことに由来する。さらに、延べ語数、異なり語数の増加量がほぼ同量であることから、新たに増加した語は使用度数が低いと見ることが可能である。一頁あたり四二語平均の漢語が使用されることは、『金閣寺』と全く同数である。

この作品は、透と本多の心理小説の形態を持つことから、ここでも観念的な語が大半を占める。

しかし、作品の分量が増加すると、同じ割合で漢語が増える几帳面さは三島の大きな特色であると言えよう。一つの記事に同じ語を使わないという厳しい態度の現れである。

3 品詞別の整理

二作品の品詞別の数量は表<1>の通りである。表中の数字は延べ語数である。

延べ%		延べ%		「天人五衰」	「金閣寺」	作品品詞
「天 人五衰」	「金 閣寺」	「天 人五衰」	「金 閣寺」			
76.7	78.8	78.1	79.9	9610 (3911)	8903 (3322)	名詞
10.7	9.6	11.5	9.8	1175 (546)	1079 (490)	動詞
10.3	8.7	8.5	8.4	1068 (522)	938 (563)	動形容詞
0.4	0.2	0.6	0.4	29 (18)	46 (25)	形容詞
1.9	2.7	1.3	1.6	325 (100)	181 (52)	副詞
100	100	100	100	12207 (5097)	11147 (4252)	合計

(カッコ内は異なり語数)

品詞別の傾向がほぼ同じであることは、%欄に明らかである。この割合は、日本語全体における漢語の品詞の傾向と大体において差がないものと推測できる。

4 語構成による整理

これらの漢語が如何なる複合形式をとって現れているかを調査した結果を次に示す。

二作品における漢語は、極端に複雑な複合形式を持つものは少ない。九〇%近くは一字あるいは二字漢語である。主に単純な語構成の語を助詞と共に用いる傾向の作家である。ここでは、三字以上の漢語がどのような構造を持つかに重点を置き整理を試みた。

この複雑な語構成を持つ語は、作家の造語意識に深い関連がある。造語を文章表現中に積極的に使用するとすると、語構成は自然複雑化する為である。

三島は『文章讀本』^{注(9)}中に造語について次のように評する。

（造語とは）字引に出てゐない言葉のことです。一例が、久米正雄氏は微苦笑といふ言葉を發明し、今日ではそれは誰でも知つてゐる言葉になりました。これこそは小説家のセンスが、人間のまざれもない表情をとらへて、それから新しい作つた言葉で表現を與へたわけであります。私はここでは社會評論家がつて、一時流行させる、いはゆる流行語は問題にしません。文學者の造語とは輕薄な流行語とちがつて、いままでにある言葉ではどうしても表現できないことを、言葉を曲げても表現しようとする最大の切實さがなければ意味がないのであります。

さらには新人作家がやたらに新造語を用いることについて、「誠實味を缺く」と批判するに至る。これは、否定はしないまでも、造語に対して厳しい態度を示すものであるが、實際も漢語については新造語の少ない作家であることが、単純な語構成が大半を占めることにおいて判明する。

(1) 漢語の語構成

漢語の語構成については、意味論的や形態論的な立場から種々論じられている。山田孝雄博士は『國語の中に於ける漢語の研究』

中で、一字漢語、二字漢語、三字漢語、四字以上の漢語と分類し、その中を意味・接辞の種類・複合形式等において觀察的な考察を試みられた。佐藤喜代治博士も、ほぼ同様の見解を示す。また、松下大三郎氏は、対等関係・修飾関係・実質関係・補足関係・客体関係の意味的關係による五分類を示した。森岡健二氏は、「文字形態素論」^{注(10)}中に、自立語・派生語・合成語の三構造を挙げ

る。本稿は、日本語の形態觀察を目的とするものでなく、さらには、複合語として和語や外来語との結合形式・和漢混種語も広義の漢語と認める立場を取るもので、語構成の分類を、次のように規定するものである。

(a) 字音語のみによる語 (K)^{注(12)}・和語との複合形式を持つ語 (和漢混種語を含む) (K+W or W+K)・外来語との複合形式を持つ語 (K+G・or G+K) の三つに分類する。

(b) K 分類の語にては、一字漢語 (1K) 二字漢語 (2K) 等の構成漢字数による分類を行う。

(c) それぞれについて、自立・派生語の別、品詞の別による分類を行う。

(d) K+W 又は W+K 分類に属する語は、重箱読み (J)、湯桶読み (U)、K+W、W+K の四種に分け、品詞の別によつて分類する。

(e) G+K、K+G については、同じく、品詞の別を示す。

(f) 字音平仮名表記 (H) についての品詞別を示す。

造語に関連深いのは、三字以上の字音語と、(d)(e) 分類の語である。

以下に挙げる表(2)は、右の分類法による二作品の調査結果である。

表(2) 分類

分類		漢字数		複合形式		自立派生		品詞							
K		1K		2K		自立語		派生語							
						名詞		動詞							
						副詞		形容詞							
61	12	643	728	40	46	6710	54	0	69	311	23	627	延べ 異なり	「金閣寺」	
18	9	234	419	34	22	2216	4	0	9	57	5	125	延べ 異なり	「天人五衰」	
64	6	731	745	73	133	6482	84	2	54	364	2	874	延べ 異なり		
42	4	341	431	37	28	2439	10	1	10	80	2	132			
													用	例	
													愛・真・損・天・死・生・詩 お嬢さん・坊さん 持する・舒する・制する・模する 急だ・雑だ・直だ・妙だ 愛らしい 暗に・實に・切に・單に		
													自滅・習性・悲哀・嘲笑 多分・突然・一旦・丁度・常住 鄭重さ・忠實さ・繁雑さ・殘酷さ 豫想する・揺曳する・喜戯する 汚穢だ・奇盜だ・輕佻だ・廣闊だ 冗々しい・四角い・莫迦らしい・鬱陶しい 肅々と・堂々と・雜然と 卒然と・次第に		

5K					4K					3K											
4K +K	3K +2K	2K +3K	K+ 4K	K+K+ K+K	3K +K	2K +2K	K +3K	K+K +K	2K +K	K+2K	自立語	派生語	動詞	形容動詞	名詞	副詞	名詞				
6	26	0	15	3	0	2	27	0	3	0	188	11	1	118	1	450	64	0	0	1	149
6	24	0	14	3	0	2	26	0	2	0	150	9	1	73	1	267	31	0	0	1	99
10	40	1	41	2	0	10	44	2	15	1	320	8	0	135	7	721	75	1	3	1	201
10	37	1	34	2	0	10	32	1	13	1	231	7	0	84	7	386	38	1	3	1	110
滿二十一歳 自己正當化・五時五十分・厭退辯護士 必要不可欠だ 一般的方則・記述式問題・浪漫派氣質 促成栽培用・英國紳士風					形而下的だ・辯證法的だ・無歴史のだ 自動車道・二十一時・八十一年 莫迦々々しい 簡單明瞭だ・正確無比だ・天真爛漫だ 時々刻々 法律構成・美術全集・非常階段					大競技場・大哲學者・小應接室 貪頭癡 永續的だ・最終的だ・肉體的だ 非常識だ・不規則だ・上機嫌だ・無目的だ 分析力・肉體美・投身用・認識者 客観化する・危険視する・論理化する 御案内する 無邪氣さ・不透明さ・無器用さ 層一層・刻一刻 不定形・無意識・再構成・三時間											

K + W																																									
2K		1K					9K	8K	7K						6K																										
2K +W	K+W					J	2K +7K	2K +6K	K +6K	2K +6K	3K +4K	4K +6K	5K +2K	6K +K	K +5K	2K +4K	3K +3K	4K +2K	5K +K	K+K+K +K+K																					
							自立語	自立語	自立語	自立語	自立語	自立語	自立語	自立語	自立語	自立語	自立語	自立語	自立語	形容動詞																					
助詞	名詞	形容動詞	助詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	名詞	形容動詞																					
6	132	9	1	29	27	106	0	2	0	1	0	0	0	0	13	4	2	1	0	3																					
4	92	7	1	5	19	47	0	2	0	1	0	0	0	0	9	4	2	1	0	3																					
6	119	7	7	48	26	124	2	1	0	2	2	3	2	1	0	11	7	17	3	1	2																				
6	82	5	6	18	16	52	2	1	0	1	2	2	2	1	0	11	6	9	2	1	2																				
印象づける・運命づける		二三組・認識屋・皮肉屋		氣高い・詮ない		氣取る・役立つ・信じ切る		氣まぐれだ・念入りだ		氣高い・詮ない		總入齒・氣兼ね		類繪・氣持・具合・本物・味方		夏期木材滿載吃水線		午後三時三十五分		三級無線通信士・火災自動警報器		十一月二十三日		港灣管理事務所		百科辭典的知識		一萬二千五百圓		國際の大問題・天才の犯罪者		昭和三十五年		一億二千萬圓		理解者の意見		蕭笛 零 笠篋		十九世紀風だ・自己冒瀆的だ	

G+K		K+G				W+K															
2K	1K	4K以上	3K	2K	1K	3K以上	2K			1K	4K以上		3K								
		4K +0	3K +0	2K +0	K +0		w+2k	u+w (k)		w+k	u	4k +w	(k) j+w	k +w							
名	名	名	名	名	名	形容動詞	名	形容動詞	名	形容詞	名	形容動詞	動	名	名	名	名	動	名	形容詞	形容動詞
3	8	0	0	4	6	1 1	2 63	2 23	0 3	14 167	3	1	0 5	23 1							
3	4	0	0	4	6	1 1	2 44	1 20	0 3	12 54	3	1	0 4	8 1							
17	30	6	6	26	6	1 3	6 90	3 36	2 4	21 176	1	2	0 2	12 4							
16	23	6	6	25	6	1 3	6 65	3 26	2 3	15 55	1	2	0 2	8 3							
トランプ模様	アメリカ風	九千八百三十三噸	四十七パーセント	映畫スタア・廻轉ドア・大學ノート	胃カメラ 一セクト	手持無沙汰だ	不自由・南回帰線	好加減だ・身綺麗だ・小利口だ	長講譯・匙加減	否應ない・何気ない	四千坪・何函回	今風だ・昔風だ	相應ず・相對す	賣り出し用	四人・湯氣・夕刻・見様・何年	記念寫眞屋	尺取蟲	藝術家肌	面倒くさい・禮儀正しい	意地悪だ・當感げだ	

H		3K							
名詞	名詞	形容動詞	副詞	0	0	2	2	トラク運轉手	
41	10	31	19	0	0	2	2	はう・一生けんめい	
7	4	4	7	0	0	2	2	ふしぎだ・そんざいだ・きれいだ	
50	25	25	42	2	2	2	2	大てい・大そう・一そう・らくらくと	
6	5	5	18	2	2	2	2		

以上の調査結果を、(a)字音のみで構成される語、(b)和語と漢語の複合形式、(c)外来語と漢語の複合形式の三点において整理すると表③のようになる。

『天人五衰』	『金閣寺』	
11417 (4635)	10507 (3905)	(a)
697 (377)	619 (368)	(b)
93 (84)	21 (17)	(c)
12207 (5097)	11147 (4252)	合計

表③ (カッコ内は異なり語数)

本来の漢語である字音語のみの語が九〇%以上を占め、他を圧倒している。造語可能な部分において使用率が低いことは、彼の造語に対する厳しい態度を反映するものである。二作品共にこの傾向は変わらない。

さらに、(a)では、『天人五衰』中に明らかに増加がみられるが、(b)は異なり語数において大差ないことが観察できる。『天人五衰』と『金閣寺』には三〇頁の分量差があるので、前者に増加がみられることは当然の結果であると考えられる。その中で(b)和語・漢語の複合形式に、二作品で増減が少ないことは重要である。作品

の分量や性格に関わらず、その量が一定しているのは、造語的要素が大きな形式であるのに、一般的語彙ばかりを使用していることを意味する。

(例)氣持・場所・割烹着・好加減だ・禮儀正しい・手持無沙汰
(c)については、両作品とも使用率が低いのが、『天人五衰』にみられる増加は、作品の性格の違いによるものである。『金閣寺』の俗世間と隔絶された仏教世界において、外来語は態度に使用が制限されるが、『天人五衰』には右のような制約はない。さらに『天人五衰』は、港灣施設の描写に詳しく、海上交通に関する専門用語が外来語に負うところが大きいことも一因である。

バナマ船

従って、その増加率も低いことから、三島の語彙選択の変化と見ることはできない。造語と認定し得る語も観察できない。

(a)においては、二作品の差が明らかであるので、どの複合形式に差異が認められるかを示すこととする。

表(4)

増加率(%)		『天人五衰』		『金閻寺』		
異なり語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数	
14.9	21.4	235	1380	200	1084	1K
11.2	(-) 0.09	3323	8233	2952	8240	2K
24.5	31.4	630	1144	474	785	3K
35.9	42.2	295	400	189	231	4K
42.5	45.3	87	97	50	53	5K
42.9	37.5	28	32	16	20	6K
87.5	90.0	8	10	1	1	7K
(-) 100	(-) 100	1	1	2	2	8K
100	100	2	2	0	0	9K
		4609	11299	3884	10416	計

(注) 増加率は、『天人五衰』の数値を100とした場合、『金閻寺』

に対する増加率がその中で占める割合を示すものである。

延べ語数を比較した時、二作品共に、七〇%以上を占めるのは2K即ち二字漢語である。以下一字漢語、三字漢語、四字漢語、五字漢語と続き、七字漢語以上は極く希にしか現れない。このことは、三島が単純な複合形式の語を主体に文章を構成していることを意味する。

異なり語数についても結果はほぼ同様であるが、複雑な語構成

を持つ語ほど一回性のものが多く、従って語数順位の一位と三位が逆転する現象がおこっている。

また、二作品におけるそれぞれの語数の差を、増加率によって観察すると、三字以上の漢語の割合が大きいことが明確である。

表(2)に返ってさらに詳しく分類すると、三字漢語では、2K+1Kの形式を取る名詞が、四字漢語では、2K+2Kの名詞が、それぞれ増加著しいことがわかる。しかし『金閻寺』よりも『天人五衰』に具体的事象を示す語が顕著であることより、観念的語彙には、これほどの大差はないと考えられる。

六字漢語以上については、両作品共に用例数が少ない為、増加率による比較は意味をなさないが、三字漢語等と同様、具体的事象を示す語が増えていると言える。

二字漢語については、異なり語数において三六九語の差がみられるが、延べ語数がほぼ同数であることから、『金閻寺』に非常に多用された語があることがわかる。「世界」一〇〇回、「老師」二四〇回等がそれである。また、ここでは、固有名詞として対象外としたが「金閻」は実に三三八回も使用されている。「天人五衰」には、「金閻」に類する役割を受け持つ語が登場し得なかつたことから、異なり語数に差が生じたものと考えてよさそうである。一定の分量の文章表現内における漢語の許容量には、自と限界があることも一因であろう。

さて、字音のみによる語構成の漢語において造語たり得るのは、

三字以上の漢語である。これらが量的には、『金閣寺』一〇・五%、『天人五衰』一四・九%と字音語中でも少数派であることから、ここでは造語に対する三島の姿勢を窺うことができる。特に造語要素として認められる「的」を含む語についても一般的語彙が多い。

④ 感傷的だ・感傷的だ・精神的だ

強いて造語的と考え得るのは、「無歴史のだ」(『天人五衰』)ぐらいであるが、これも三島の造語とは断定しにくく、「的」についても独自性はみられないと言えよう。

5 多用語の比較

三島由紀夫は『文章讀本』中で、

私はまた、二、三行ごとに同じ言葉が出て来ないやうに注意します。「一例が、まえに「病氣」と書いたときは、次には「やまい」と書こうとします。

と述べるように、同一語句を何度も用いないのが立て前である。実際一作品中に四、五千語の異なり語を用いることで前掲の言を表現している(九〇%近くが一回性の語彙である)。

その中で多用されている語は反対に三島作品において重要な役割を果たしていると言える。彼の言に反して繰り返し用いられる語について次に考察する。

この項では二作品それぞれにおける使用度数の多い語群について、その一致度を調査する。これは多用語に一様性があるかどうか

かを明らかにして、三島の中心的漢語彙は何かを考える。『天人五衰』の使用度数10以上の語を多用語と認定し、それらの『金閣寺』における使用度数を示したのが次表⑤である。

表⑤

		1 K													語構成		
		名 詞													多用語		
受す	感じ	晚	陸	僕	別	美	肉	點	生	實	死	客	氣	惡	愛	使用度数	『金閣寺』 使用5以上
38	22	12	10	291	16	21	24	10	48	16	48	24	57	25	32		
35	19	2	0	13	34	88	32	4	45	5	45	10	59	20	17		
(以下は斜線表示)																	

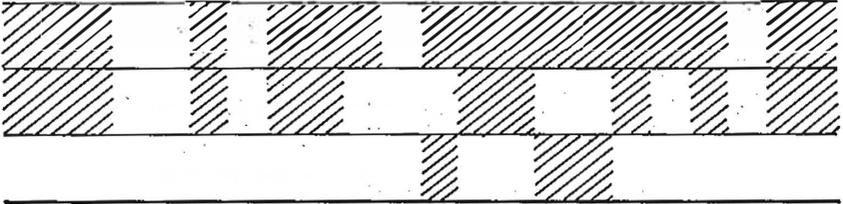
2 K																													
名 詞													副詞	形容動詞	動 詞														
意	一	一	一	一	醫	一	一	一	以	意	意	意	決	實	別	風	急	命	對	信	生	感	し	じ	じ	じ	じ	じ	じ
味	方	緒	瞬	種	者	番	日	度	上	識	志		して	に	だ	だ	だ	じ	する	じる	じる	じる							
13	18	12	13	10	12	16	12	30	20	17	15		59	12	12	13	13	10	39	31	15	59							
37	12	12	6	20	1	1	13	23	13	11	8		39	9	10	26	8	3	40	33	4	64							

財	最	今	根	午	五	誤	幸	氣	結	恐	希	機	記	觀	感	感	學	荷	快	階	迎
産	後	度	據	後	衰	解	福	配	果	怖	望	構	憶	念	情	覺	校	役	樂	段	命
14	14	15	11	17	17	10	13	13	10	10	11	12	16	14	23	12	13	11	11	22	13
1	22	16	3	15	0	4	7	9	8	5	5	0	22	5	44	10	33	0	9	4	6

精生人所女少少障瞬宿醜自寫自自自思自自時色時山
 神活生長中年女子問命聞由真分體想身信刻情間門

11 14 22 24 15 92 10 12 15 12 11 13 15 290 28 10 18 10 10 16 28 11

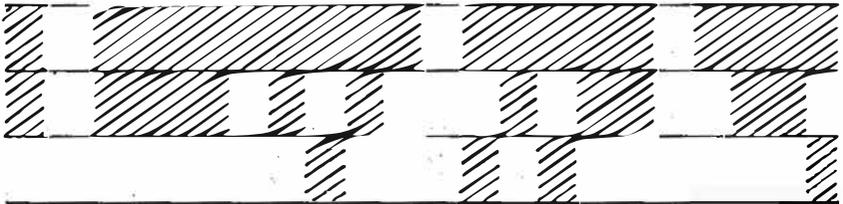
13 18 48 0 0 25 0 11 20 1 0 8 14 133 6 9 19 2 10 0 35 20



必卑背認人日肉土同天鐵男他太慊存船刹世世青
 要俗後識間本體地時人塔女人陽度在名那間界年

11 17 11 21 87 13 24 11 12 50 11 12 29 10 10 38 10 10 27 64 15

13 0 10 30 56 3 26 8 11 3 0 5 20 5 11 36 0 1 12 100 6



3K																					
名詞	副詞			形容動詞							動詞										
一時間	突	一	一	微妙だ	透明だ	退屈だ	巨大だ	完全だ	過激だ	安心する	老人	理由	欲望	糞子	問題	門跡	目録	日本	返事	不安	病氣
10	28	14	16	16	11	10	15	12	10	12	52	16	12	17	12	27	10	44	10	17	16
2	39	3	3	4	15	2	9	24	1	12	15	17	29	0	5	0	11	21	6	25	5
(以下、斜線表示のセルはデータが不明またはゼロ)																					

語と、単純な形式の語が占める。一字漢語の異なり語数二五、二多用語においても、語構成の場合と同じく、二字漢語、一字漢

H	U	K+W		J																	
形容動詞	名詞	名詞		動詞	名詞																
(不思議)	ほう(方)	場	夕	彼	氣づく	半	氣	六十年	望遠鏡	水平線	信號所	自尊心	好奇心	喫茶店	貨物船	家政婦	運轉手	自意識			
14	44	15	19	53	19	10	29	13	35	31	14	25	11	10	10	10	10	21			
29	32	10	2	54	24	2	23	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0			
(以下、斜線表示のセルはデータが不明またはゼロ)																					

字漢語九八、三字漢語一二、和漢混種語六、字音語平仮名表記二である。

また、『金閣寺』との一致度は、一字漢語、二字漢語、和漢混種語、平仮名表記において高く、三字漢語になると、著しく一致度が減少する。これは複雑な語構成を持つようになる程、具体的事象を意味する率が高くなることに由来すると思われる。二字漢語においても、一致しない語は、殆どが具象的意味を持つ語であることがわかっている。従って、三島が二作品を通じて多く用いる漢語は観念的意味範疇に属する語であるということが言えるのである。

混種語・平仮名表記については、最も和語に近い形態であることから非常に一般的に用いられている語として、必然的に両作品共に多く使用される結果となったものと考えられる。

なお、ここで『金閣寺』と一致しなかった語は僅か二三語にすぎないが、これらの語が『天人五衰』独自の語彙なのであり、作品の特色となる語であることも付記しておく。

さらに一致度を数値的に示すと次の様になる。

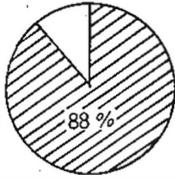


図 A

図Aは、『天人五衰』の多用語のうち『金閣寺』に使用されている語の割合を示すものである。約九〇%の一致度が観察できる。図Bでは、図Aにおいて一致したもののうち、『金閣寺』でも使用度数10

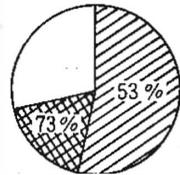


図 B

以上である語の割合である。約半数の一致度が見られるが、使用度数1、2の語が九〇%を占める中、五回以上使用されている語は、少くとも多用語と認め得ることから、使用度数に幅を持たせると、

実に七割強が一致することがわかる。二作品がいかに同一漢語を中心とする語彙群の範囲内で作られているかが明確である。

『現代雑誌九十種の用語字』調査によると、延べ約四一萬語中異なり語数は約三萬語であり、これ以上調査規模を大きくしても異なり語数の増加は少ない筈という中野洋氏の見解^{注(25)}より、これを日本語の総異なり語数に近いものと仮定しよう。このうち漢語は、混種語を含めて約一萬五千語と推定でき、三島が『金閣寺』で用いた漢語の異なり語数が四二五二、『天人五衰』が五〇九七であるので、一作品中の三島の異なり語彙は相当量であることがわかる。

しかし先に示したように、その多数の異なり語のうち中心を示める多用語が二作品において一致するということは、三島の基本語彙がここに現れていることとなり興味深い。

さらに、本稿では便宜上多用語のみの比較に留めることとなったが、全漢語の一致度を見ると、意想外に高い数値を示していることを注記する。これは三島作品における観念的語彙が占める役割が大きいことに一因があると思われる。特に、形容動詞

の一致度は高く、「澄明だ」等、度々作品に用いられる語が少なくない。

6 まとめ

以上、『金隠寺』と『天人五衰』の漢語を比較する時、品詞、語構成、多用語の三点から観察した場合、ほぼ同傾向にあると結論付けられる。

このことは、三島は漢語の語選択において、各作品共通の部分が多いことを示す。漢語に限定した時、題材が異なっても同一語彙を中心に文章が構成されていることが推測できるのである。異なる語が多数であっても、それは、一回性のものが多く、中心となる語は、どの作品でもほぼ同一であるということである。

また中期から後期にかけて選択語彙が固定的であることは、彼の基本語彙が形成された時期が非常に早期であったことも意味する。彼は十代前半から既に文筆活動を始めており、初期との比較も可能であるが、短篇ばかりであるので中後期の長篇と同一線上で考察してよいか疑問が残る。しかし、語彙の一致度が高いであろう予測はつくものである。

三島自身は自己の文体の変革について度々告白している。しかし、漢語の面に限って考える時、彼の文体は、作品によって殆ど差異がないという結論に達するのである。語彙面においては、彼の自己改革も及ばなかったと考えられる。

三島の文体において漢語はどの様な位置を占めるのかという問

題が残るが、裝飾過多で文章が死んでいると酷評されることの多い三島作品中で、漢語もまた多分に裝飾的要素として用いられていると考える。今後は、三島の漢語と修辭について論証したいと考える。

注(1)テキストは新潮社『三島由紀夫全集・10』所収を使用した。

注(2)テキストは新潮社『天人五衰』（第二版）を使用した。

注(3)『三島由紀夫全集・28』所収。

注(4)『三島由紀夫全集・30』所収。

注(5)寶文館『國語の中に於ける漢語の研究』（S15）。

注(6)角川書店『日本の漢語』（S54）。

注(7)国立国語研究所『現代語の婦人雑誌の用語』は、調査単位

にα単位を取ったが、「自家製／＼ム」の様に二語とする語も多数あった。

注(8)β単位は、国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字』の調査単位である。

注(9)五六三頁。

注(10)『日本の漢語』中における分類。

注(11)『近代語の成立』明治期『明治書院』「文字形態素論」における分類。

注(12)字音語ⅡK、和語ⅡW、重箱読みⅡJ、湯桶読みⅡU、

外来語ⅡG、字音語平仮名表記ⅡHは、筆者が便宜的に

